

『都市・農村問題と兼農居住』

景山質 著

恒星社厚生閣 [刊] 1944年7月 B6判 / 330頁 図書番号 0A-0718

戦時中の1944（昭和19）年に刊行された本書は、都市の「人口密集過多」や農村における「農民の離村」「労力欠乏」等の諸問題を「国防上の見地」から考察し、その解決策について論じたものである。

第1編と第2編では都市と農村の現状について述べる。近代以降、「報酬獲得の機会」を求めて地方の人々が都市へと流入し、「人口の都市集中」をもたらした。このことから著者は「現代主要都市は益々膨張の一途を進む」としながら、「細民の増加」「貧民街の発生」など現代都市の「幾多の欠陥」を指摘する。一方農村は「人口数増加を続けて居る」が、「耕地が乏しきが故」に「農村労働者の過剰」を招いた。「農村の貧窮状態と人口の過剰」によって多くの農民が出稼労働者となり、離村して都市へと流入した。著者は、こうした「出稼する人数の激増」が、農村に「農繁期の労力不足」「婦女子の農業労働強化」「主要農産の減退」を引き起こしたとする。

第3編では「都市人口の過大」について論じる。都市への人口密集は「空襲に対する懸念」から問題であり、人口の都市集中は抑制すべきと説く。そのために「予想し得る限りの計画を建て都市改善を心掛くる事が必要」であり、都市計画が重要だと述べる。そして都市計画事業の好例として、帝都復興事業と欧州の田園都市を挙げる。田園都市に関しては、「周囲に田園区域を設定したる都市の新型式」であり「土に帰ると同時に都市味をも失わざる生活を楽しみ得る」と評価しながら、「空地の余裕狭小にして空爆を避くるに充分ならず」「農産物の収穫の点に於いて到底自給自足するには不十分」等至らぬ点も指摘する。

第4編では国民の健康状態を取り上げる。著者は統計から「我國民は諸文明国民に比し短命」で「死亡率は諸文明国に比して高率」と分析する。特に1歳未満の乳幼児死亡率が高く、主な死因は「早産に因る先天性弱質」と「肺炎並下痢及腸炎」である。「小児の死亡率の高きは人口増殖上寒心すべき現象」で早急に改善せねばならず、そのために婦人の保護を必要とする。具体的な保護策として「母体の過労を軽減する事」「母性の教養を高め、育児の栄養に注意し看護の適正を得る事」を提言している。

第5編では「工業の無計画的なる都市集中」の是正を訴える。「工業地帯に於ける生産集中は人口の都市集中となり、空襲等軍事的見地より危険」である。ゆえに「産業人口等の要する一国生産諸力を合理的に配分する」ための国土計画を策定し、工業の地方分散を促すべきと主張する。

第6編と7編では、「兼農居住」について論じる。農林省調査によれば、離村者の過半数は再び帰村しているため、「農村出稼者の都市労働者化防止の対策が必要」となる。その対策として著者は「兼農居住」を提唱する。兼農居住とは、住居を工場から「田園を以て隔てたる地域」に造り「建築敷地の外に農耕の余地を併存」する事で、「宅地に防空的の余地を具え、平素は農耕して工業勤務を為しつつ食糧の自給生活を為す事」である。巻末で著者は、兼農居住が「健民健兵を期待し得べき国防対策であると同時に、都市及農村共に繁栄すべき共存の措置」だと結論付けている。

（井上学・市政専門図書館司書）